

うふふふふふふ。

「長い」

なんでそんなこと言うの！ 私は私だけの世界を創りたいのよ！

「知らん。でもたまにはこんな風にふざけるのはいいんでしょね」

貴様！ ふざけると言う言葉をどこで知った！ 貴様！

「なんで、もう一回いうの。貴様という言葉は我にしかないとでもいうのですか？」

知らない。だって、今回も始まったんだもの。

「……そうね。また始まっちゃったんだね……。作者もいい加減飽きるということを知らないのかと問い詰めたくなるけど」

いや、大丈夫。この系統の作品は売れるから書くらしい。かきくけこさんが言っていました。

「そうか、不審雷さんが言っていたんですね」

誰よ。いや、それより。

「それより？」

言葉上の喧嘩ってやめませんか？

「喧嘩じゃない！ 鵜の如くだ！」

意味不明ですね。だってねわたしだってわからないことはあるんですよ？

「あるのか。というかわかってもらいたくない気分ってあるんだね」

うふふふふふふふふh。

「ひいー！　それだけはやめて！」

始まるよー！

「ひいー！」

というわけで。

「はいはい始まりましたね。今回もまたもや意味不明な会話文と地の文という素晴らしくくだらないさくひんが」

始まったんですよ。最後にシリアスに持っていくのにいい加減疲れたと話題のあの方に来ていただきました！

「誰？」

やだあ！　置いてかないで！

「誰？」

ええ？　これでわからないの？

「わからん。というかわかるはずがなかろうよ。いつも言っているでしょ？　感動は涙を流しながらすることだよ、って」

うーん。しってはいけないことをあなたはいつてしまった。

「ひらがなにする必要は皆無だということに気付いてしまったんですね？」

お前も、私のターンが始まったら、動画共有サービス見てこい！

「ああ、君の声は気持ちいいねえ！」

キモいよ！ もつと魍魎のなんたらかんたらを見てこい！

「はい、川のグローブを忘れてきました」

何のネタだよ。というかさ、意味不明な始まりをしておつかないおばさんが傍にるのは気のせいですか？

「おじいさんだけ行つてはダメだったんですけどね」

いいじゃん。だって、おじいさんなんだし。

「おじいさんって優しい野菜なんだよ？ んでもつておばあちゃんは哀しい果物なんです」  
そしてナイフで切りつけるんですね？ 野菜！ 貴様を斬らなければ私は食事ができない！  
と。

「いや、それは、取りようにとつてはすごく残酷じゃありません？」

そんな日々が流れ仕舞ったんですよ。手がないけど。

「いや、まて。それより、必要なものが在るのではないか？」

存在を否定されるほど、ヘルメット被らなければならぬのか？

「知らないよ。私はおじさんと仲良くする必要が泣ければ、そのときはまた」

そのことが終わったたら私が入れた珈琲を見たいな感じ？

「それは、著作者の作品じゃないか！」

そうですが！

「じゃあ、今日はそれについて語ろうか？」

だけど、僕には何も残されていないことしかわからない。

「どうした、突然」

いつものことだけど、ずっと、君のことを見ていました。

「知らないよ、あんたのことなんて」

でも、いいんです。僕は貴女のことを愛していたことぐらいできる人間だったって知ってるから。

「そっか、君にも残されていたんだね。僕のことを知っているのはまだ、何も残されていないということなんだから」

だから、いつの日か、僕に言ってくれたサヨナラを貴方にも伝えたくて。だから、僕は――。

「いつの日か、彼女と彼の間に絆が結ばれていることに気付くだろう。お互い、そういった運命の下、結ばれたのだから」

だけど、それでも、いつも笑っていたのはその他の人たち。

「彼女たちはいつまでも同じ演技を続ける舞台の役者と何ら変わりがないことを」

それほど、虚無で。

「それほど、悲哀で」

でも、喜怒哀楽が入った舞台はいつまでも続く。

「もし、もしも。彼女たちが自発的に気付くことなく永遠に続くのなら」  
もう、ここには観客がない。だけど、知っている。

「彼女たちは踊るかのように笑っては泣いて。喜んで悲しんで。いつも行っていたことを笑っていたのだから」

そして、演技は終わった。

「私はコーヒーでも飲もうか」

僕はココアでも飲もうか。

「そして、気付いているサヨナラとアリガトウを重ねて」

そしてまた、演技が続く。

「いつになったら彼女たちは気付くのだろう」

そう、その舞台を見ているという最後の人が帰るまで。

「彼女たちは舞台を続ける」

そう、永遠に――。

「終わりのない舞台を演じる楽しさが恐らくあるのだろう。でも、それでいいと思う」

だから――。

「私たちは幸せだよ」

僕達も幸せだよ。

「そして、あなたは？」

もちろん、幸せ――。

はい、イミフな物語が始まって終わりました。内容的に全然違うので読者の皆さん、もちろんの如く忘れてしまいなさい。

「なぜ、上から目線？」：

だって、横やり野郎にやーはダメでしょ。

「横やりなんて？」

にやー。ですよ。猫ですよ。キャットですよ。カラカルですよ。

「知らねえです。僕ちんなんて戸津穆と語れば良いんです」

だれよ。とかさ、オムライスにんでデミグラスなんてものを掛けるんだろーね。

「タイムラグが発生。いますぐ、オムライスを食せよ」

ばくばく。もぐもぐ。海に帰りたい！

「オヤジギャグが発生。いますぐ、親父にカエラ」

布団が吹っ飛んだ！ 猫が寝込んだ！ 車がくるまー。

「最期のはわからん」

何れのことを以てしても彼女には伝わらなかったようだな。

「だってえ。ぼくは！ カルピが飲みたいの！」

著作権危険問題はやめなさい！

「長い！ じゃあ、ぼくもいう！」

……ちなみに何を？

「ちよさくけん！ いばらきけん！ わかやまけん！ しんけん！ おじいさんなんて嫌いだー」

イメージ的には崖で大きな声で叫んでいる感覚で合っている加奈？

「あってます。ありがとうと呼ばれるこの日まで。そして、いずれにしろ、おやじさんとはまたやり合うよ。僕には負けがないからだ！」

うるさい。五月蠅が飛んでるぐらいうるさい。

「でも、頭の蠅も負えないくせにさ、オヤジギャグを言わせるなんて酷いよ。親父！ 飯を用意しろ！」

俺の、俺の、俺の話を聞け。

「何の詩？」

消える飛行機雲ぐらいにわかりません。

「でも、あの時、私は夜空を見つめていました。まだ、綺麗な月が輝いているときでした」とつぜん、なんだ。もう、慣れた感があるが。

「夜空を飛んでいる天使様がパーティを汲んでいました。先頭に戦士を持ってきて」それはなんのカードゲームかな。(笑)

「そして、明るみにされた罪を行ってしまったことを悔やんで懺悔しました」

おじいさん、私はまだ帰ることはできないようです。

「でも、それでも、彼女は笑って。笑って転げて。ころころからから」

おじいさん。一緒に行きたかった。なのに、どうしてですか？

「おじいさんは笑いながら言いました。五月蠅が飛んでいるのにわしにはできることではない、と」

夜空は煌めく。それでも、笑っている。月の傍に兎が白に餅をいれてついていました。

「ウサギは笑いながら、餅は疲れながら、斜を持っていました」

でも、もうそれも終わり。

「私たちが帰る場所には何かが在る。それは必然的に応えになっているだろう」

おわったら、また行こうね。

「おじいさん。おじいさん。一緒にいたお母さん。いつも笑っていたのは誰だったの？」



わからないわ。でも、良いの。私もお父さんが笑ってくれたのなら、幸せだから。

「ここまでで、日記は終わっている」

日記の内容的に恐らく、犯人は錯乱していたと思われる。

「だが、日記帳の最後に一言書かれていることに刑事は気付いた。そして戦慄を覚えた」  
わしには大切なものがある、それは。

「君のことだ」

いや、無理やり、繋げても仕方ないでしょ。

「仕方なくなんかない！　だって最後のオチが思いつかなかったんだもん」

まあ、いいんだけどさ。

「でもね、おじいさんはきつと幸せになっているよ？　おじいさんは笑いながら華を見ているから」

知りません！

「知つとけ！」

というわけで、こんにちへです。私の名前は以下同文。

「誰？」

以下同文ですよ。私のことを忘れるなんて良い度胸ね。

「知りません。きつとね、おじいさんは笑いながら、笑ったんです。だから、笑っているのだと思います」

うっふっふっふ。

「何？」

うっふっふ。

「どうした？」

うっふ。

「キモいぞ」

うっ！

「終わったか」

う。

「いつまで？」

う

「ついに読点まで」

う。

「いや、始まらんでいいのに」

つまりはそのことだったんですね。

「なにが？」

お時期の答えは期待なんてしなくて良かったですよ？

「其れ程恐ろしいものが在るわけないだろ！ インパルス！ ペイン！」

親父。おれは貴様を赦さない！ 罪を暴け、さよならと行ってみろ！

「誰だ！」

うつうつふ。私の名前はオーケストラ、八方神の一人である。

「つまりは、このX地点に代数を入れればいいんですね？」

私の配下ペインを倒したのは勇者、ラベナイン、貴様だな？

「でも、 $2xy$ が解けないと思うんですけど。気のせいですか？」

ラベナイン。貴様は人の話を聞くとのことではないのか。

「そうか！ なるほど、この関数を解けばxがわかる！」

おい、人の話を聞いてくれよ、

「そして、結果は……」

いや、だから、凶器を持つて近づいてくるのは如何なものか……。

「やったxが3だつてわかつたあ！ やつたあ！」

ぐわああー……！

「ん？ あれ、ゲームが止まつてる。ま、いつか」